

ヒラメ放流技術開発調査 一抄録一

上原子次男・※早川 豊・十三 邦昭・三戸 芳典

田村 亘・藤田 修央

(※現青森県水産増殖センター勤務)

発 表 誌 名

平成元年度放流技術開発事業報告書、日本海ブロックヒラメ班、平成2年3月、P57～63

抄 録

- (1) 天然稚魚の生息密度は、最高 7.7×10^{-3} 尾/ m^2 と推定され、低水準である61年以降にあつては最も高い値となっている。
- (2) 天然稚魚の成長は、7月25日全長モード2cm台、8月3日全長モード3cm台、8月22日全長モード7cm台であつた。
- (3) アミの分布は、水深10m域より5m域に多かつた。分布量は季節的変動が少なく、56年以降最低の水準であつた。
- (4) 魚類稚魚の分布は、8月22日以降みられた。エビジャコの分布は、8月22日までは水深5m域に多く、9月以降分布量はやや減少した。
- (5) 人工種苗30,500尾(全長40～113mm、平均74mm)を水深3m域に放流し、分散、生残を調べた。放流後13日(9月5日)までに水深10m以深に移動したと考えられ、放流後40日までの生残率は1日当たり96%と推定された。
- (6) 放流2日後の摂餌率は、サイズの小さい種苗ほど高かつた。
- (7) クロウシノシタ、ササウシノシタ、ネズッポ、メゴチ、ヒラメ稚魚の胃内容からは、ヒラメ稚魚は確認されなかつた。
- (8) 標識放流した人工種苗は、99%が40km以内で再捕され、移動距離は時間の経過と共に大きくなる傾向はみられない。
- (9) 天然稚魚の無限側における黒色色素の分布を3タイプに分けた。
- (10) 鰯ヶ沢市場(底曳による漁獲を除く。)における体色異常魚の占める割合は、15%であつた。
- (11) 調査海域のヒラメ漁獲量は、昨年の70トンを下回り31トンであつた。